

アトリエ 琉游舎 だより 89号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2020年10月7日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

街灯の 光とどかぬ 舗道にて 落葉あかるく 月照りにけり

- 何気なく読んでいた本で見かけた短歌、作者は佐藤佐太郎です。秋の一点景を切り抜いた秀歌です。夜の7時か8時くらいでしょうか、仕事を終えて家路に急ぐ中、近所の公園を通った作者が落ち葉を照らす澄んだ月にふと足を止め、秋を体感する姿が目には浮かびます。
- 「街灯」が「外灯」となっていたら、この歌はちょうど今頃から冬にかけてのコリーナの情景そのものです。外灯に照らされる場所と比べて、「光とどかぬ舗道」の方が圧倒的に多い所ですが、懐中電灯を併用すれば夜の散歩には困りません。落ち葉を踏みしめるサクサクというリズムカルな足音と青白く澄んだ月の美しさ、そして虫たちの声。秋ですね。
- 満月の夜は月の明かりがあまりにも強すぎて、周りの星は見えません。西や北に目を向けると今度は外灯の明かりが目に入ってこれもまた星が見えません。月明かりと星の瞬きだけが夜の光だったときから幾千年も経て、私たちは今、不夜城の夜を手に入れました。
- 手に入れたものがあるということは失ったものもあるということ。夜空の美と静寂、神秘や畏れなどが私たちの失ったものだとすれば、得たものはなんでしょう、安全？安らぎ？豊かさ？喧噪？不眠不休？もし夜空の向こうにみえるものが縦横に飛び交う人工衛星の軌跡だけならば味気ないですね。私たちは心底、月や星や暗い夜空を愛でているのでしょうか。
- 冒頭の歌から随分飛躍してしまいました。文学絵画音楽などの芸術はただ鑑賞するだけでなく、各々の想像力の世界で自由に遊ぶことを許してくれます。琉游舎も皆さんが思い思いの想像力の中で自由に遊ぶことのできる「場」でありたいと願っています。

10・11月スケジュール

木 金 土 日

月	火	水	8	9	10	11
12	13 読書会 13時半	14	15 映画会 13:30	16	17 詩話会 13時半	18
19	20	21	22 映画会 13:30	23	24	25 居酒屋の会 16時半
26	27 読書会 13時半	28	29 映画会 13:30	30	31 11月1日 写経会 13時半	
2	3	4	5 映画会 13:30	6	7	8
9	10 読書会 13時半	11	12 映画会 13:30	13	14 詩話会 13時半	15

詩話会
10月10日(土)
11月14日(土)
13時半から

読書会
10月13日(火)
27日(火)
11月10日(火)
13時半から

居酒屋の会
10月25日(日)
16時半から

写経会
11月1日(日)
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

板木が「コツコツ」と鳴ったらどなたか見えた合図です。琉游舎ではドアフォンやベルが設置されていないので、初めての方はどうやって訪問を告げればよいか玄関先で迷われていることと思います。大きな声で訪う方やノックする方もいますが、ドアベル代わりとおぼしき板木を見つけてこれでよいのか迷いながら叩く音が聞こえると、どなたが来たのだろうと心が浮き立ち足早に玄関の扉を開けます。都会に住んでいた頃は、訪問者と言えば荷物の配達かセールスや勧誘の類しかありませんでした。大概是ベルが鳴ると誰？何の用？と不信感が先に立ち、モニターで扉の開閉を判断して、開けることは稀でした。かつての我が家の扉は侵入者を防ぐ防御の扉だったならば、今の琉游舎の扉は「まれびと（客人）」を歓迎し招き入れる扉です。

先日、文字通り「まれびと」が琉游舎を訪れました。珍客です。コツコツと板木の鳴る音で扉を開けると、見知らぬ男の人が細長いものを手に下げて私の目の前にさし出すのです。えっ！トカゲ？「前の道にマムシの赤ちゃんが死んでいた、この様子だとまだ親と合わせて7, 8匹はいるはず、気を付けるように」と、注意喚起をしに来てくれたのでした。彼はここが開発された30年以上前からこの山に入り猪を鉄砲で撃っていたとのこと、ここはマムシの巣だったが、開発によって最近あまり見かけなくなっていた、今日久しぶりに見つけた。用心のため頭部を押え、ほらここがスーッと赤いだろう、赤マムシだ。特別な焼酎につけたマムシ酒はうまいぞ。最後に、マムシは猪の好物なんだがちょっと捕りすぎたかな。と言って去っていきました。

「まれびと」は稀に来る人の意味で、今では客人や珍客と同じように使われますが、古代の信仰の中では神や聖なる者の来訪を意味しました。折口信夫は異界から人間界に来訪する聖なる者（まれびと）が私たちに幸福をもたらすという信仰に、日本の古代信仰の根源があるとし、異界の異人に対しては畏敬の観念をもちこれを厚くもてなす異人歓待の観念が「まつり」や芸能の源流であると考えました。日本人は本来異なる文化や民族を受け入れ歓待する、外に開けた民族だったことがこの古代信仰に伺えます。その末裔である私もこの「まれびと」を聖なるものの来訪として畏敬の観念を持たなければならないはずですが、さて。

私は迷信俗信を信じる者ではありませんが、その様な考え方が出てきた人間の心理や環境や事象などに思いを巡らすべきだと考えます。長い間人々に信じられてきたという事実は重いものです。ですから迷信俗信を科学的根拠がない妄想だと切り捨ててよい訳がありません。先日訪れた「まれびと」も、たまたま前の道に紛れ込んだマムシを通りがかったマムシに詳しい人が見つけ、近くにいた私に親切心で知らせたとみれば、それは「毒蛇出没、危険、注意！」という警告です。これはごく一般的な現代人の見方です。一方、山（異界）から道（境界）を命がけで渡り、私（俗界）に幸福（災厄）をもたらそうとしたマムシ（聖なるもの）は途中で力尽き、代わりのもの（まれびと）がかのものの思いを使者として私に告げてくれたとも考えられるのです。これは「聖なるものや異界との交感」を信じる日本人の信仰の根源です。後者は、原始宗教が呪物や精霊崇拝から多神教へ発展しやがて一神教が生まれたと考える宗教進化論からすると、未開人の見方です。現代に生きる宗教家はこの未開人と現代人との見方の間を大きく揺れ動く振り子である必要があると私は考えます。事実、私は合理的現代人として翌日ホームセンターに行き「ヘビレス」という名のヘビを寄せ付けない忌避剤を購入して庭に撒きました。一度は招き入れた「まれびと」を二度は招き入れないぞと言う意思表示です。一方、かのもは私に何を告げ何をさせようとしていたのか、その想念が未だに私の頭から消えることはありません。私はかのもは私の住み家であろう道の向こう側の崖の淵まで行き、深い底を覗き込みます。そして谷底に降りて行きたいという誘惑に駆られ、やがてそこに吸い込まれていくのでした。

この「まれびと」の訪れは、この現代に宗教家として生きることが可能かという命題を私に考えさせる出来事でした。すっかり理性的思考に飼いならされてしまった私に、あの世や地獄や浄土や閻魔大王や輪廻や悪霊や怨霊やと、書きだせば限がない仏教に関わる俗信を合理的に説明できるわけがありません。それはあなたの心の中の問題だといえればそれまでなのですが、それですべてが説明できると考えれば、それはもはや宗教ではなく心理学の領域です。宗教による安寧と救いを“それはあなた自身の心の問題だから自分で解決しなさい”と自己責任に帰することは宗教の無力を意味します。一方、谷底（異界）に吸い込まれて行った私が“異界の聖なるものとの交感で特別な呪術力を授かり、俗界のあらゆる不幸や苦悩を幸福と歓喜に変えることができる”と宣言したならば、それは高僧か稀代の詐欺師か精神医学のクランケか、紙一重でしょう。

私はここに宗教のもつ両極端の様相をちょっとだけ極端な表現で示してみました。今、宗教はこの極端をはみ出さないよう行儀よく社会の中に収まっています。“自助共助公助”という題目の下、自己責任ありきの社会を作ること積極的に肩入れする宗教に「自行化他」^{注1}という大乘仏教の根本精神を見ることはできません。また谷底（異界）への誘惑へ駆られることもなく、教団の認可だけを根拠として加持祈祷祓いを行う行為は経済活動にすぎず、聖なる者との同一化を希求する行為とは認められません。私は一人の宗教家としてこの両極端を揺れ動く振り子でありたいと思います。社会の中に居場所を定めそこに歯車として収まることは、宗教のあり方として一見正しいことのようにですが、社会と共存しても同質化してしまっただけは宗教になりえないのです。社会の中の振り子として常に「行い」続けることが宗教です。

振り子が止まるときは「行い」が止むときです。

そしてそこには二度と「まれびと」は訪れないでしょう。

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

メール：toi10lizuru@outlook.jp